

乳児にも肛門周囲膿瘍や痔瘻ができます

内痔核は起立歩行である人間に特徴的な疾患で、肛門周囲膿瘍や痔瘻も一般に大人に発症する疾患とされています。しかし、まだ這い這いでオムツがとれていない乳児にも肛門周囲膿瘍やまれに痔瘻を生ずることがあります。大人の肛門周囲膿瘍や痔瘻が肛門腺からの逆行性感染(いわゆる crypt-glandular theory)と考えられているのに対し、小児の肛門周囲膿瘍は母親から小児への免疫能の移行期での免疫能の低下、肛門周囲の組織間隙の脆弱、オムツ等による汚染などが関与しているといわれ、基本的に別の病態として扱われています。



【乳児肛門周囲膿瘍の特徴】

- 0~2歳以下にみられることが多い。
- 男児に多い
- 表在性で筋間を貫かない。
- 側方にできることが多く、直線的な走行。
- 多発することがある。
- ほとんど自然治癒する。

図1 乳児肛門周囲膿瘍

治療

軽度の場合は穿刺(18G 針)や抗生物質の投与で軽快することもあります。波動を触知する場合は膿瘍をしっかり切開・排膿することが大切です。切開後は局所の洗浄や坐浴を行い抗生物質入り軟膏を塗布します。まれに慢性化して瘻孔を形成することがありますが、オムツが取れる頃にほとんどが自然治癒することが多いため根気強く局所の洗浄を続けることが大切です。ちなみに私は約30例の乳児肛門周囲膿瘍を治療しましたが、手術を行ったのは多発(4か所)及び慢性化した1例のみです。